晏れることのない海は・・・・・

志榮嵩耶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
晏れることのない海は・・・・・

【Ｎコード】
Ｎ１０７３Ａ

【作者名】
志榮嵩耶

【あらすじ】
男尊女卑の国が舞台。女は教育すら受けさせてもらえない上、１５になると美しい女は国の官吏相手に身体を売らなければならないという女にとっては最悪な国そこで出逢ってしまう晏亜（くれあ）と海音（かいん）のラブストーリー。しかし１部では海音の母となる梨音（りおん）と父、良春（りょうしゅん）のお話海音が生まれて海音と晏亜が出逢うまでを描きます

ｔｙｒａｎｎｉｅｓ～弧特～（前書き）

最初はおそらく？って思うような意味不明なことになってますが・・・
だんだんに判明してきます
純粋なラブストーリーではなく今はまだブラックに出来てます。心
が温かくなったり、愉快な気分にはおそらくなれないと思います・・
・それでも読みたい方はどうぞ！

tyrannies～孤特～

晏れることのない海は・・・・・
～孤特～

tyrannies

あるのなら
日が訪れるのだろう
持ち主へ
持ち主へ
なら命を捨てればいい
怖さを忘れ
らの手で葬り去ることが
る愚かな仕草
のか
のか

この地に太陽と恵みが
いつの日にか報われる
実る果実は綺麗な手の
腐った果実は醜い手の
零れた果実が欲しいの
生に飢える人々は死の
ただ今という真実を自
足掻きながら唯一求め
誰に求められ生まれた
誰に憎まれ死んでいく

いないこの地球で
実に縋るだけ
ただわからないだけ

瞳の澄んだ住人が今は
確かめられる術はなく
確かめようとも思わず
今はただ腐りきった果
欲しいものは何か
望まないのは全て
わかりたいんじゃなく

周りの風景はきっと変わらないのかもしれない
たとえ、昨日まで生きていた人間がそこで野垂れ死にしていたとしても
私が殺ったんじゃないの、美味しいものを食べてる人が殺したの
だって私に誰かを殺して得る物なんて井戸の水のひと掬いよりも意味がないのだから
言葉だって思想だって別に必要なんかじゃないの

身体だって精神だって別に必要なんかじゃないの
今はこの使い物にならない耳を余計に壊してくこの爆音がどうにかなればいいと思ってる
瞳が澄んでる人間は妖精とか神様が見えるって昨日生きてた軍の首領が言ってた
きっと嘘・・・。そんなものが今、この世に存在しているのなら私はなぜここにいるの？
澄んでて見えるんじゃない、澄んでない人間しかいないから見えない

ほら・・また、どっかの浮浪者の首が転がってきた
この浮浪者だってきっと報われて良かったのよ
無いものねだりしか出来ないに凡人と全て持ってる私とは何もかもが違う

紫泉慶が崩壊？そんな甘い話があったらそこらの屍骸に集ってる虫が寄ってくるわ
もしもあれが壊れる時が来たのなら世界の崩壊、少なくともこの国の崩壊
崩壊しても私の利益なんてこれっぽっちもないの
女が増えるだけ、身体の汚れた女が増えるだけ、そして死ぬだけ
また歩く道が細くなる
どこを見ても街のオブジェみたいに置いてある屍はもう花すらも手向けてもらえない
だってこの国では死んだ方の負け。生きてる人間が勝ち
死ねば天国とか地獄に逝くらしいけど今はそんなもの興味が無い

「雨ね・・・」

ほら廃人たちが無意味に起きだした。ゾンビみたいに気色が悪い・・・

。そんなに雨水が美味いのかいつか食してみたい
私はそんなクダラナイ生き方も育ち方もしない
だって私は凡人でもないし、偉人でもないの
もちろん口を開けて、天を仰ぐあの廃人もどきでもない
「でもあんたたちみたいに死んでいいのに生きてる奴らとも違うの」

そう含みたっぷりの言葉を私よりも背丈が無い幼い無知脳の少女に捧げた
そして他人のように男達が集う酒場にくり出した

酒場に入った瞬間、私にふさわしい酒の香りが鼻腔を支配した

「おぉ梨音ちゃん。何飲む?」
「そうね・・・とりあえずワイン」

古びた木製のカウンターには仕事もせずに呑んだ暮れる男達が国の情勢について語ってた。次第に強くなる雨音に混じって遠く遠いどこかで爆音の音がする

「まだ終わらないの・・?ここまで来たらもう国揚げての大戦争かなんかすればいいじゃない」
「まぁ政府も大変なんだよ。あぁ見えてフュール族の一件が他国に漏れないようにしてるんだし」

「ここにもフュール族がいるわよ・・って政府に教えてあげようかしら」
「でもよくそのタトゥーしてて平気だね」
「ほんと・・。まだここには政府軍も来ないみたいだし・・そんな

首都ばっか壊しても仕方ないじゃないね」
「ずっと気になってたことがあるんだけども梨音ちゃん聞いてもいい？」
「どうぞ・・タダ酒の分を何でも聞いて」

「この国の女は話せないだろ？なんで」
「あぁ・・簡単な話。母親は国が躍起になって探してるフュール族だけど父親は他国にいる官吏。１０までは私も他の国にいたし。教育だって受けさせてもらってた」
「あぁそれで」
「でもなんであたしはここに入れるの？」
「まぁ葎久がお気に入りだからだろ？」

「誰それ？」
「前にここの常連だった、国の野郎。でも今は軍のいいとこにいるらしい」
「そんなのがどうして？」
「前、覚えてないか・・？路上で男に向かって罵声上げてた梨音ちゃんをここに連れてきて匿った奴」
「あぁ・・あの調子乗ってる男ね。」
「あいつがさ。梨音ちゃんに一目惚れしたらしくて。ほら男って好きな女を特別扱いするだろ？あれでさ・・梨音ちゃんは周りの女と違って喋れるし・・・汚れて野垂れ死にしてほしくなかったんだろ？」
「なるほど・・・。禾影さんにはそういう人いないの？」
「いたけど・・お呼びがね」
「あぁ紫泉ね」
「気をつけたほうがいい。もう見た目だけで梨音ちゃんは仕事出来そうだもんな」
「１３には見えない？」

「まず13でワインを嗜んでる時点で」
「やっぱね・・・。フュールでも仕事するのかしら？」
「あ～最悪な選択かもしれないね」
「身売りか死刑かって感じ？」

「まぁもしもの場合は良春がどうにかするんじゃない？」
「あたしあの人あんま好かないのよね。顔はいいけど中途半端な感じが嫌」
「あいつは優柔不断だしな」
「嫌よ～白か黒か出せない男は」
「白ってどんな男？」
「ソフトな温かいかんじのヘタレ野郎。黒はハードな冷酷なあたしのタイプ」
「あ・・・良春終わったな。あいつ頑張っても白だろうしな」
「まぁあの人は黒に元々なれそうもないわね」

「そしてこの後、私はその白にも黒にもなれない男に愛されてしまうのでした

ｔｙｒａｎｎｉｅｓ～弧特～（後書き）

ダークなお話を最後まで読んで頂いてほんと感謝感激です！！えっと・・フュール族はそのうちにキャラが説明をしてくれるとおもいますが。軽く言っておくと、普通の人間と瞳や肌の色が違ったり、おかしな刺青が首にあったりで国に隔離させられて・・・ってまぁ梨音はその娘ってことになってます。いい加減だなぁ・・私。禾影は梨音を看板娘というような感覚で見てます。果たして１３でお酒を呑んで酔わないのかな？梨音ちゃん・・・。この作品を読んだ友人達にも梨音は大好評です・・母なるともっとすごいことになります・・母になったほうが好評だというのが事実
作者からするとちょっとびみょ～な心情です

ｄｅａｄｌｅａｖｅｓ～不義～（前書き）

自分が酒を呑めるワケを知った梨音。そして助けられた日以来に梨音は初めて良春とお酒を呑みます。今回は前話よりも笑えるかな？と思ってるので前話のイメージでもう嫌だ～！と思った方もいると思うのですが＜ｂｒ＞今回は読んでもちょっとはユルくなってるのでチャレンジしてみてください（泣）

deadleaves～不義～

deadleaves　～

不義～

いつか必ず幕が下りる
始めから演者はいらない
何も得ずに消える生涯
元々必要であるはずが
夢が終わることが必然
この世界の全てが不必要
大事なものがあるのなら
きっと敵などを自ら作
捨てられない何かに悩
元々何も手に入れなく
海からいつか水が無く
空からいつか光がなく

のであれば
など
ない
である以上

ったりしない
むのなら
ていい
なったら
なったら

私から何がなくなったら
私は私でなくなるので

何も要らない
全て要らない
誰もが消えればいい

しょうか？

今でもあたしはこうやって酒を呑んでいられる。だけど何でだか・・・・あの白男が隣にいる

「悪いけど・・・好みじゃないのよねぇ」
「いいじゃん。俺は梨音ちゃんが好きなんだよ～」

１３で官吏だと・・・そしてあたしより酒に弱い・・・時々この店にやって来ては顔を朱に染めグデグデに酔っ払い道端で吐く
本気でウザい。いくらこいつのおかげで酒が呑め、政府の奴らが来た時にあたしを死守してくれるとはいえ・・・・嫌
顔と金はいいとして。その救いようも無い、だらしのない性格が本気で嫌・・・所詮・白

時々、見せる年相応な素顔には心を奪われる・・奪われたことあったかもしれない
ただ・・・他が無理。だいたい・・・女を抱いたこともないくせに厭らしい話を唾を飛ばしながら語る生物。こういうのが官吏である
以上この国がまともになれるわけがない

どんな身分かも知らない、親がどのくらいの金持ちで、屋根のある床がある地で寝てるのか・・？想像も出来ないししたくもない

いつだったか、この世にはいなければならない必要な者といなくて構わない・・むしろいるべきではない不必要な者に分けられると聞いた

もしもノウノウと酒を嗜み、好きなだけ欲求を満たすような者どもが必要な物体なのだったら・・・不必要な者なんてこの世にいないもしも本当にそんな風に人が分けられるのなら・・必要な人間以外は今すぐ死ねばいい。誰が分けるのか・・？そんなこと知らないだって・・・人類を分けられるような賢い選別が出来るような奴、この世にいないのだから。いたりしたらあたしはこんなにも不幸じゃない

別に誰が一番、不幸かなんか比べたくも争いたくもない。そんなヒマがあるのなら今すぐ死んで欲しい

あたしが不幸なのは事実。だって幸福な奴が隣で泥酔してるの。世界は全て比例して動いてるの。幸せな奴がいるということは不幸な奴がいるに決まってる。人生なんて、生涯なんて不幸な人間がいるから哀れな生き物がいるから、誰かが幸福で愉快なのだと悟った

前にいたマトモな国では、母親は家にいた。周りからは綺麗な母親だとか首の刺青と自黒な素肌がお洒落だと言われて。父は毎晩、帰って来て美味しい夕食と家族の談話を楽しんでいた。官吏だとは言えど家庭を顧みずにはしなかった

なぜこの国では刺青も小麦色の肌も碧い瞳も。そしてこの黒い髪も・・。オカシイ者扱いを受けなければならないのか？あの国では母を中心に黒髪はブームになっていたし、碧い瞳は天使の様な瞳だとまで言われた。拓けている自由な国は他人の文化や特徴を受け入れる。

だから発展する

それが当然だと思ってた。きっと世界中、この風貌に羨望の瞳を向けてくれると思ってた。父が死んで、母は行き場を失った。そして故郷に戻った。だけど・・母ももういない
ここに来る意味があったのか？あるはずもない。あるのなら教えて欲しい・・今すぐにちゃんと求めた答えを授けてほしい

「梨音ちゃん」
「・・・何よ？」
「ここは危険だよぉ～」
「あぁそう」

顔を真っ赤にした酔っ払いにそんな忠告、受けても怖くも無い。どっちかって言うとあんたのほうが何倍も何千倍もあたしにしてみたら危険

「ほんとだよぉ～」
「じゃあ具体的に何が？」
「えっ～！？俺、ガキだからわかんねぇ」
「・・ってかずっと聞きたいことあんたにあったの」
「なぁ～にぃ？」

酔っ払いにまともに相手してるとこっちの脳みそがイカレそうになってくる。馬鹿がうつるっていうか・・・泣けてくる・・アホみたいに

「あんた親の七光りなの？」
「・・・・・？」
あぁ馬鹿&酔っ払いに高度な言葉を投げかけても無駄に決まってる。

もっと早くに気付けば１％くらい労力の無駄遣いを防げたかも

「梨音ちゃん。今のこいつに何聞いても無駄だよ。頭の中、お祭り騒ぎだからさ」

「・・・はは」

「まぁ代わりに俺が答えると・・・梨音ちゃんの七光りは間違っちゃいない・・でも」

「でも・・何？」

「こいつは１３だろ。なのにこいつの一声でこの店を潰すこと出来る。でも・・コイツ自身、まだ幼さ過ぎて気付いてない」

「禾影さんにはわかるの？」

「これでも１８なんで」

「・・・・そっか」

「こいつ親父が首都の官吏でさ。いわゆるお偉い様なわけ・・んで息子にも早くこの国の国家体制みたいなもんわかりさせるってか一種の洗脳」

「・・・これで洗脳されてるわけ？」

「いや・・・意外と苦戦してるらしい。なんでももうさっそく疑問感じちゃってるらしくてさ」

「・・・何に？」

「梨音ちゃんを愛したが故に紫泉慶の存在も知ったわけで。なんで俺の女が捕られるんだ？と」

「ちょっとその前に訂正。あたしはこいつの女じゃない」

「まぁそこは・・いいとして」

「・・・ん。続けて。あんま納得できないけど」

「んで・・洗脳から逃げてここでこうしてんの」

「あぁ・・もっとクダラナイ」

「んでどうやら・・」

「ん？」

「こいつ梨音ちゃんを連れて亡命覚悟らしいぜ」

「・・・一人で行け」
「まぁあと2年の猶予はあるわけだし」
「そりゃ・・ね。もちろん一緒に行ったりしないけど」
「でもこういう馬鹿みたいな奴は突拍子もないことやりだすから手に負えない」
「そうなったら、刺し違えてでも遠慮するわ」
「まぁ・・こいつは一生、白の運命だからね」
「どっかで黒に転換しないかしら」

この時の禾影さんの言葉もっとちゃんと受け止めておくべきだったと今更になって後悔してる。あぁやっぱりあたしは背伸びが通じないただのガキに違いないのね。酒が呑めても、喋れようとも、思想があっても、何を手にしていても。この国にいる以上、この男といる以上所詮、お子様な自分

ｄｅａｄｌｅａｖｅｓ～不義～（後書き）

えっと・・・とりあえず読んで頂きほんとにありがとございますっ！！えっと最初の文は暗くなってましたが終わりの方は少し笑えましたよね？どうにか明るく努力していきたいと思います。しかし・・次からは急展開です。ってかもう急スギでほんと今からでも謝っておきます！でも読んで見てください～（泣）

ｄａｒｌｉｎｇ～母性～（前書き）

これは前話から一気に話が変わります。２年後の少しだけ大人になった梨音の話です。前話までは良春を散々馬鹿にしていた梨音だったけど・・。今までのよりはぐっとポジティブになった梨音ちゃんを見てやってくださいっ

darling～母性～

～母性～

darling

あるから人が死ぬ
形態な物を手にしたから
な希望
かに不幸かわかる
万民
せて量りたいのは
クダラナイ哀れみの花を

愛とか夢とかが人間に
愛なんていう漠然で無
誰もが不幸になっていく
夢なんて無意味で安易
希望を持つから今がい
天秤に乗せて物を量る
だけど誰もが天秤に乗
自分と他人の不幸の量
自分が軽ければ相手に

他人が軽ければ自分に
結局周りの誰もが不幸
争って不幸比べをして
愚かな優越感に浸りた
もしも生きてるうちが
不幸負けした髑髏達は
命を捨てれば幸福にな
でもきっと命がないの

クダラナイ哀れみの花を
だから
誰かよりも
いだけ
不幸なら
幸福なのだろう
れるのだろうか
は一番哀れ

――――2年後
どことなく今だダルさが残る朝方。ここに来てからロクにワインも呑んでない。昔のように　マトモな建物も道路もここにはない
あるのは爆撃を受けて屋根も壁も失った物体。腐敗した臭いがこの世界を蝕んでいた。
昼なのか夜なのかわからない大きな空。雲なのか煙なのかそれすらも判別出来やしない
遠くにハゲ山が見える。いつから生えていたのか、いつ伐られた

のかすら定かじゃない。
消えることのない屍を焼いた煙・・そして腐敗臭

どこからかっぱらって来たのか、周りとは違う格好してるあたしに妬みの針が突き刺さる。　周りと同じなのは素足だってことくらいで、周りの女のように胸やら尻が破れた隙間から見　えるような寒々しい格好なんてあたしはしない。あたしは昔から全て違う。幸福に違う。官　吏の服は暖かく丈夫だ。金ボタンに鷲の紋章・・別に靴が無かったわけじゃない。ただあい　つよりもあたしは靴の大きさが違うから。大きいから軍人に追っかけられた時、靴が脱げる
だからってそこらの浮浪者にあげるわけでもない。ただ飾り物にしてるだけよ・・紺の官吏　の服は痩せ細った栄養不足な身体には大きすぎてある意味不恰好。美味しい物は食べてな　い・・・ここ最近。だいたいあたしに食える物があるんだったら隣で眠りこける幼子にあげてる

父親の靴を抱きしめて夢に彷徨う子はこの世で一番・・美しいものみたいだ
「ワインが呑みたい・・ねっ海音」
１５で母になったことには今でも疑問ばかりだ。碧い瞳と黒い髪そしてこの首の刺青。そし　て土地に不釣合いなマトモな格好。子育てに不似合いな環境。腐った全て、この世に生を受けたばかりの幼児にはふさわしくないものばかり・・。指の指紋は掠れてもう傷だらけで爪の隙間には不潔なほど土が詰まってる
そんな指を恋焦がれてるかのように執拗に舐めようとする子供。まだ瞳が開いてまもなくでまだこの世が美しいものばかりだと誤解してる
あたしは子供に刺青なんて入れない。母がどうしてあたしに刺青を入れたかはわかんないけ　ど・・あたしは海音には入れない

あの白に襲われて出来た哀れな子。産みたくもないのに産んでしまった赤子。あいつは１５　のくせに2年前よりももっといい地位に上り詰めてる。強引に殴られて気を失ってるスキにユーベリアンの奥山に連れて来られた。ここはもうフュール族はここから去ったのだろうか？

地面には軍がフュール族を捕まえるために使った爆撃の跡が今も生々しく残ってる

フュール族なんて一般人民からすれば１０分の１しかいないのに・・それを捕まえるために　何万っていう一般人が無意味に殺されてる。このまんまじゃフュール族は逃げ延びて一般人が死んで、ユーベリアン大陸ストルウェル連合王国はフュール族の国になるわ

ここの人間達は毎日することもなく、日も当たらず雨も降らないこの土地でただ無意味に田　を耕して、咲かない花を育てて、茂らない木に思いも巡らせ・・すること全てがくだらなくただ毎日、毎日が堕落している

「良春・・？」

集落の崖はあたしの場所。誰と関わるわけでもなくただただ集落を見下ろせるその崖に座る　母子はただ哀れなだけ。あいつが来るのをただただ忠実に待つ。昔はあいつが嫌いだった

ロクにいい人生を歩んできたわけでも無いのにあたしよりもいい暮らしをしてた。ハードで　クールな男になら攫われてもいいと思ったのに。何でよりにもよってあの優柔不断な白男に攫われ襲われあげくに身籠りあぁアホみたいだ・・あたし

あたしが１０まで生きてたあの国では１２月２５日は幸福な日だと言われてた。美味しい料　理と豪華な飾り。そして高価な贈り物をもらえる。そんな日にこんな貧困な街で生まれてしまった息子は・

・誰にも祝福されることもなく生まれた

あたしは一人でどしゃぶりの雨の中、彼を産み落とした。どうやって育てていいのかなんて　１５の娘にわかるわけもない

親もいなければ知り合いもいない。身籠った重い身体で似合わない幼い顔。他のマトモな国　だったらきっと医者に誰かが運んでくれたの。ここじゃ運ぶところか、あたしが死んだ隙にあたしの着てる服を奪おうとする奴らばかり。海音だってあたしが目を離せば、すぐに身売りに攫われる。そして子供を売って自分の食い扶持にする・・そんな国でこの子がちゃんと育つのかなんてあたしにはわからない

「梨音？」

「へっ？」

あたしを呼ぶ人間なんてそうそういるわけない。そして普通にあたし達親子に近づこうとす　る人間もいない

「梨音？寒い中外にいるなよ」

「中なんてないわよ」

「は？」

「ここに人間が住む場所なんてないわよ」

「・・・ごめん」

あたしはこいつと結婚した。それにはまずこいつが黒になることを条件に結婚した。１５でどれくらい黒になれるのか知ったもんじゃなかったけど意外と黒になれるもんだ・・って思った

「でも・・お前さ」

「何・・？」

「なんで海音ってつけたんだ？」

「あたしは海に行ったことも漣なんていう綺麗なもの見たことも聞いたこともないの」

「あぁ」
「それで・・・あたしの字を入れたらこんな風な名前になったのよ」
「命名の理由が中途半端だな」
「そうかもしれないわね」
「いつか3人で海に行かないか？」
「・・・・徒歩で？」
「は？」
「徒歩でこんな山奥から子供連れて海に行くの？行けるわけないじゃない」
「・・・確かに」
「出来ないことは言わないで」

「あぁそう・・・」
「でも自分の故郷でもないくせになんでこんな山奥にあたし達を連れて来たのよ」
「・・・なんとなく」
「・・・・・あぁそう」
「・・・どしたの？」
「貴方に根拠とか論理求めても無理だってこと忘れてた」
「お前・・俺のこと馬鹿にしてるだろ？」
「ううん。やっぱり貴方は馬鹿だってこと再認識しただけだから」

いつからだろう？人間が嫌いで信じるなんてことも知らなかったのに・・・でも今はこの男はいいとして海音だけでも守ろうって思えた
それが母性愛とかいう漠然とした物体なのか・・・。それともただ優しい人間にでもなってしまったのか？自分でもわからないしわかりたくない

この消える間近みたいな蝋燭の灯。そんな日常がいつまでも続けばいいのに、なんて曇った空を・・・・見ながら思った

ｄａｒｌｉｎｇ～母性～（後書き）

えっと・・最後のほうは梨音・あんた変わったねぇって思えてくるような感じがしてなりません（あたしだけ？）やっぱり子供が出来ると母性本能が生まれるんだなぁって・・・子供がいないあたしには推測でしか書けなかったですけど・・・。ここからあともうちょっとは梨音の幸福が続きますが・・・。あることを理由にこっから怒涛の人生になっちゃいます＜ｂｒ＞海音は主役なのにまだまだ赤ちゃんでストーリーにはまだまだ何も・・って次話ではもう喋れるくらいまで＜ｂｒ＞年月が過ぎちゃうかもしれないです。３話も読んで頂いてほんとに感謝します！これからも長い作品ですけどぜひとも読んで頂きたく思います！！

ｉｎｎｏｃｅｎｔ～悲鳴～（前書き）

今回は5歳の海音です。はい飛ばしスギでごめんなさい・・・。今回は前話よりもお母さんらしくなった梨音が見物です・・。作者が言うことじゃないか（笑）＜ｂｒ＞子を守ろうとする母そして・・海音が一番いい環境は？と考えてる母です。ちなみに良春は今回いないです・・今回は海音が喋ってます☆海音の幼い頃を初めて描いたのでなんかびみょ～な仕上がりになっちゃっいました。とりあえず読んでみてください

innocent～悲鳴～

innocent　～悲鳴～

けるのは
が変われば
た時から思って
ない理由は
の上にいる奴ら
が咲き誇ろう
とも
うな木々
が手に入ってる
手に入れれば笑顔に

雨が降って女が口を開
今でも変わることがない
いつかこの腐った世界
きっとここに足を着け
この国が無ければなら
神や天使や偉そうに空
知ってるわけもなく
青葉が茂ろうとも花々
落葉が人々を魅せよう
銀世界と廃人の腕のよ
何もいらないのは全て
何も欲しくないは何を

なれるか生まれたとき
何を見ても怯え
何を聞いても泣き
ただここにいる人間に
ここの人民は不幸の形

からわからないから

幸福も不幸もわからない

「何か食べたい物ある？」
「・・・ない」
「あぁそう・・・」
可愛くない子供。あたしにそっくり・・未来にも現在にも希望なんて持たずに今日どう生きるかに全てを費やしてる
昔、育ったマトモな国では義務教育なんてものを受けさせてもらってた。母親が言うには大学という所に２０くらいまで通っていればいい家にもいい夫にも巡り会えるんだって言ってた・・そして一生生活に困らない程の金が手に入ると・・・言ってた

あたしにはいい家もいい夫にも・・そして金も２０になった今でも手に入ってない・・きっとこの国でそんな幸せなもの手に入れられる
人間なんていなくて・・実際、官吏を夫に持つあたしだって・・・地面這いずり回って、今日の食い扶持を探すのに必死だ
国の頂点で働く官吏だって皆が皆、善い暮らししてるわけじゃない・・・。きっと国でいい暮らししてるのは王族と大統領くらいよ

王族に関しては、意味のわからない理屈から男尊女卑なんていうものを勝手に自分の地位を濫用して・・・。そんな知ってはいけない禁忌な範囲に足を踏み入れてしまったあたしには・・もうこの国

にいたくないという気持ちだけが日に日に募っていくばかりだった。それは官吏である良春には言ってない。言ったら離婚なんてことになってあたしが生きていけるわけもない・・海音だってどうなるかわからない

きっと何かない限りあたしは良春についていく・・それしかないんだから・・他の国だったらあたしはどんな風に生きてるんだろう？

5年も生きればどんなにこの世界が汚れて不公平なものかだんだんわかってくると思う。しかも46時中あたしみたいな母親が隣にいれば全てを斜に構えるに決まってる。これから一生、この子はマトモにちゃんと物を見ながら生きていけれるのかあたしみたいに可哀相にしか

生きていけなくなるんじゃないかって思う

父の色を引き継いだ海音はフュール族の特徴、碧い瞳も黒い髪も陽に焼けたような色黒な肌もなかった。一般種の良春の血が多く流れてるのか

彼は茶の瞳で茶の髪の色。見た目は社会的に生きていける・・問題はあたしの生き写しのような冷酷で信用とか純粋という言葉を知らない不自由な生き方しか出来ない性格

「寒くない？」

「・・・」

良春が首都で買ってきた暖かい服を身に纏った海音は周りからの妬みの瞳に5歳で慣れたようで・・だけどあたしのように自分は特別だとか自分が人よりも上だとか傲慢な考えは持ってないようだし・・。そして海音は妬みの瞳や隙あらば命を奪ってやろうという考えの奴らから

ひたすら怯えてあたしから生まれてから一度も離れたこともなく

て・・・。あたしは２０年間生まれてきて初めて誰かに信用され頼られてる
「ねぇ・・梨音」
「うん？」

海音は5歳になるにも関わらずあたしの服を汗ばむほど強く握ってる。そしてか細い高い声で海音はあたしにいつも問いかける。少ない言語をであたしに何かを伝えようと・・・・。

「・・いつ・・いつになったら？」
「何が・？」
「・・・・ここから・・」
「う～ん良春が官吏だからね」
「・・・・うぅ」
「いつかこんな所出よう・・」
「いつ？」
「いや・・あたしにはわからない」
「だれ・・だったらわかるの？」
「・・・誰にもわかんないね。あたし達がわかるのが先かこの国が終わるのが先か・・・それとも」
「それとも？」
あたし達が殺されるのが先か・・・。そんなこと5歳児に言った所で無駄に海音の心を傷つけるだけだ・・・・あたしだって他に向ける先のない愛情があったりするんだ
どんなに他の人間を・・この国で傷つけて痛めて・・・・。周りの人間にいくら冷酷だの愛がないだの言われ続けたけど・・今は海音にしか愛を注げない哀れな女

「・・梨音？」
「なんでもない・・いつかあたし達が毎日笑える日がくればいいね」

「うん」

海音のためにも、こんな服脱がせて周りの人間と同じようなボロボロに破れて肌が丸見えな服を着せたほうがいいのか？でも今更そんな格好をさせても今までのあたし達の行動で命の保障なんかあるわけなくて・・・・周りの人間が飢えで餓死してる死体の隣であたし達は良春がくれた僅かな食べものを食してた・・。それに・・・周りの幼子はまた別のことで海音に妬みの瞳を見せてること・・あたしは最近知った

海音は5歳になっても栄養不足で軽かった。あたしは１０までいた国での栄養を溢れんばかりにもらって割かし成長した。１０でここに来たあたしはもうすでに成人した大人の女よりも背が高かった・・・。首都にもし海音だけがいたら・・きっと働かない男達が海音をきっと

育てるんだろう・・。栄養もたくさんあって美味しいものを・・・。それも正解なのかもしれない

あたしは１３の時にお世話になった禾影さんと身長があんまり変わらなかった。禾影さんが別に低かったわけじゃない。母親が死んで・・すぐにあたしは禾影さんの所に通った・・だからあたしは成長がこれといって止まることはなかった。だから良春が１７０以上あっても、あまり

変わらなかった。あたしは１６０はあったし・・・でも海音はここで生まれここで育ってしまったから・・周りの子供よりは成長もしてる

海音は座ってるあたしによく抱きついて首に手を掛けてる・・。そして一言あたしの耳元で呟いた。そして海音が一番怯えてる理由がわかった

「みんなにはお母さんがいないんだ・・」

それはそうだ・・。男尊女卑のこの国で・・女は汚れたものでしかないのであって、腹から男の子を産んだ瞬間、女はごみ同然に捨てられる

そしてこの国では母親というものは存在しない・・・。全ての家庭が父子家庭であるから

「うん・・だね」

「どして？」

「まだ知るのには早過ぎるよ・・」

「ふぅ～ん」

いつか君に話そう・・・。この国が壊れ始めた・・狂乱な物語を・・・そうそれはある王族の女が言った一言が・・不幸になったのだから

ｉｎｎｏｃｅｎｔ～悲鳴～（後書き）

さぁどうでしたか？そんなに暗くはせず梨音ママの心の葛藤がテーマでした（嘘、今考えた）梨音と海音の命は４６時中狙われてきっとママは寝るヒマもないのでは？な～んて勝手な見解したりして。えっと次話またまた海音が成長します。そしてこの国が男尊女卑になった理由が明かされます。まだ描いてないんでどう描くか本気で悩んでます。王族の方を書いて・・・ってまぁお楽しみください☆それが終わると葎久家の悲劇が・・・ほんとこれ書くと皆さん読むのをやめちゃうんでは？な～んて不安もありますが・・とりあえず待っててください☆明日か明後日には投稿します

ｖｉｃｔｉｍ　～計画～（前書き）

今回この国の謎が明らかにされます＜ｂｒ＞これを読まれると多分、皇女に怒り破裂になるのでは？というか個人的に怒って欲しいです＜ｂｒ＞とりあえず憎みたっぷりで今回の作品、一人を書きました・・誰のことかは後書きで・・って読んじゃえば＜ｂｒ＞かなりはっきりしますね。最後の梨音と海音の会話はこれからの（というか次話の）序章っぽくなってます＜ｂｒ＞でわでわお楽しみください

victim　～計画～

victim　～計画～

消えたとしたら？
体を失うのでしょう
の炎を
真白な花束を

葉は

だけ

奴らは

しまえばいい

すら忘れ

いつの日か消えない傷が
いつの日か消える前に身
あぁ間違えた全てに烈火
あぁ犠牲になった全てに
高い位置にいる者に
不幸は一生わからない
高い位置の人間が言う言
無意味に凡人を殺すだけ
本当に必要な人間は凡人
クダラナイ血筋の王家の
巣の無い烏の餌になって
自分が人間だということ
ただ愉快にノウノウと生

きてる奴等

あぁ万民に声援を
あぁ王族に罵声を
いつか消えるこの生命を
なぜ無意味な王族に渡さ
なければならないのだろう

――――今から２００年以上も前の話

「なぜだ？なぜ私を愛さぬ？」
「・・・申し訳ありません・・・」
「なぜだ？碎槻・・。私を愛せば全てが手に入るのだぞ」
「・・・お断りいたします・・杞空さま」
「なぜだ理由を述べよ」
金髪のその女は烈火の如く怒りながら、自分に跪く茶髪の青年に問答をしていた。まるで彼女の心を表わすかのような朱の絨毯の上で
「・・・それは」
「それはなんだ！？」
「・・・」
「おぬしまさか儂以外に特別な女がいるではないだろうな・・」
自分よりも身の丈があるその男に駆け寄り、男の胸倉を掴みながらそう問いかけた。まるで子羊を相手にした獅子のように脅すかのように
男は女から瞳を逸らすとまるでそうだと認めるように女を見つめた
「そうなのだな・・・」

その言葉に男は頷き、女は踵返しのように男を背にして、二人の周りにいた臣下達に向けてこう言い放った

「皆の者！この国で美しい男に愛される女は儂だけで良いのだ。いいか皆の者！この国の女を全て不幸にし男から愛されぬようにするのだ！」

「――――――！！！」

「この国の儂以外の女は・・・・男尊女卑にしひとつも自由をあげてはならぬ」

「・・・・というと皇女さま？」

「食べ物をあげてはならぬ。家を与えてはならぬ。男を愛してはならぬ。勉学を教えてはならぬ。男を神のように称えなければならない」

「しかしそうなると・・紫泉慶は・・？」

紫泉だと・・・・。１５になれば国の美しい女は強引に拉致され管理直属の組織に入らなければいけない・・・することはただ一つ。優秀な官吏に４６時中求められるだけ身体を渡さなければならない。男尊女卑にし女が死んでいったらこの組織はどうなるのだ・・・？ならば儂の願いも政府の願いも通すには

「勝手に拉致すればよかろう・・・・。向こうに連れて行ってから全てを教え込めればよかろう」

「全て・・・？」

「言語やマナー、自分のやるべき仕事をだ」

「しかしそんなことになったら国中の男達は汚れた喋れぬ人形に欲求を果たせねばならないのですか？」

「そんな男の精神は女の儂にわかるわけがなかろう・・男の欲なんぞ勝手にすればよかろう」

「・・・わかりました。詳しい法の制定についてはまた・・」

そう言って、臣下達は去って行った。しかし広い王の間に残され

た皇女である杞空と碎槻・・・。そして皇女は男にこう言い放ち出て行った
「この国の女が不幸になるのは全ておぬし所為だ！今更おぬしがどう足掻こうとも結果は変わらぬ」

それから3月という早い速さで法は制定し、職を持っていた女も勉学に勤しんでいた女も全て追い出され路上で生きるはめになったのである
僅かに生きる手段は空からの恵み。雨水だけだった・・最初は恥を恐れて飲まず食わずだった女達もだんたん細くなる自らの身体を見て、恥を捨て大口を開け空からの恵みを飲んでいた

法にはさまざまなものがあった。子を産んだ時点で女は子を男に渡し路上で生活しなければならなかった・・・だからこの国には父子家庭しか存在しなかった。他に男は自由に働き女を好きに遊んでいいという・・・・。その法は杞空がこの世を去っても変わろうとはしなかった

「わかった・・・？」
「まぁ」
「聞きたいことあったら言ってよ？」

「じゃあなんで女達は暴動を起こそうとか他国からの来賓はどうも思わないんだ？」
「暴動を起こさないんじゃなくて起こせないのよ。だって彼女達は知能が零なんだから・・彼女が知ってると言えば雨水を飲めば多少は生きながらえるってことくらいよ。他国の来賓の時は紫泉の女達に出迎えさせればいいんだから・・・・わかった？」
「うん」

「１０の子には難しかった？」
「うん・・・この国には馬鹿しかいないってことがね」
「間違いじゃないわね」
「・・・僕にはそれ以上に謎なことあるんだけど」
「何よ？」
「良春は？」

「それが最近あんまりここ来ないのよね」
「・・・仕事忙しいの？」
「そうなんじゃない？」
「ほんとに・・？」
「何よほんとに？って」

「意外と浮気されたりして」
「あいつがあたしとあんたを捨てたら」

「捨てたら？」
「あたしはあいつを殺すかもしれないわね」

victim　～計画～（後書き）

えっと・・・普通に憎みたっぷりで書いたのは杞空です。これからも私の王族系嫌いがこういうところで暴発してしまいます・・・。えぇこれからも海音編になればもっと悪化していきます
次話ではこの一家が大変なことに・・・

Ｉｌｌｉｃｉｔ～破壊～（前書き）

今回はもうこの章、最終回一個前です＜ｂｒ＞えぇあくまでも梨音編が・・です。自分が想像してたよりもあっさりとラストは固まってしまって少々不満です。でも今回は皆さんには、は？っていう展開になります・・ご了承を

Illicit～破壊～

Illicit　～破壊～

ったのなら
しまったのだろう
もう空回りしていたのか
の物体を手にした時か
は決して今が
いうこと
りの欠片
しか脳にない
るのではない
ならないから

人間の全てに歯車があ
いつその歯車が狂って
母の腹から出た時点で
それとも言語という名
ただ一つだけわかるの
正常で健全でもないと
頭の中で掠めたしくじ
誰もがマトモでないから
貪欲に人を殺めること
殺めたいから武器を握
ただ自分が
殺される前に殺さねば

人を殺すことのどこか
誰もが今すれ違った人
生きたいというだけで
自分ではない哀れな生
その前に相手を殺す方

間違いなのだろうか？
間よりも幸福に
物に命を捕られるのなら
がマトモな行動

――――――秋

「絶対浮気じゃないの・・？」
「子供が言う台詞じゃないでしょ？」
「・・もう秋だし最後に良春がここ来たの・・春じゃん」
「んん～っ」
「じゃあ・・探しに行く？」
「えっ？」
「禾影さんが何か知ってるかもしんないし」
「・・誰？」
「じゃあ行くわよ」
「何で今から・・？」
「もしも浮気してたら殺してやる」
「はいはい・・」

別に前からそんな気がしてなかったワケじゃなくて・・・ただ海音は一途に父の帰りを待ってるのかと思ったから
そうじゃないのなら・・・。12年も一人の女愛せるような真面目でも純粋な男でもない・・きっと他国で喋れる別の女を捜してるのよ
ただ・・その理由があたしに飽きたとかいう理由だったら本当に殺してやる

さすがに戦時中なことだけはあって、首都でも路上は焼死体が山積みにされ優雅に酒を嗜んでいた男達ですら今は兵隊となりこの国の中央部分は崩壊していた

「禾影さんのお店あるのかしら？」
「誰だって・・そいつ」

10代の前半は毎日ここを歩いてた。まだ女達がいた頃・・今はもう・・生きてる人間の方が珍しかった。瓦礫の下で飢餓に苦しむ子供がいた
壊れていない建物を探す方がよっぽど困難で国が用意したのかそうじゃないのか汚れた布のテント・・。テントというよりは布が張ってあってその下にわずかな木箱やボロ布が置いてあった

慣れ親しんだ店はどこだろうか？・・・・煙が消えないこの国。それが焼夷弾の煙なのか屍を焼いた煙なのかそれとも食すために動物を焼いた煙なのか・・・・。こんな所に・・・酒飲む場所があるのか？鼻を襲うのは空襲の後の焦げ臭い・・すぐ前に空襲があったことを教えてくれる

「死んだんじゃないの？」
「そうだったらどうっすかなぁ」
「情報なしで帰るのかよ」
「・・・う～んどうするかねぇ」
「・・考えろよ」

――――１０分後

「梨音ちゃん！？」
二人で街を歩いてると見知らぬ男が呼んだ。その男は良春と同じ官吏なのか軍服に身を纏っていた。そしてこっちに向かってくる・・
あんた誰？
「えっと・・誰？」
「禾影の店によく呑んでたんだけど・・覚えてないか？」
「覚えてないです」
「もしかしてそこの坊主・・・」
「・・あの男の子供」
「へぇ～良春の・・・坊主は名前は？」
その男は海音と同じ高さまで膝を曲げると、海音の頭を撫でた・・
しかし他人には容赦なく素直にならない海音・・
「その前にあんた誰？」
「俺？俺は瀬陽・・」
「・・・海音」

「海音か～あいつが付けたのか？」
「あたし・・」
「そういえば梨音ちゃん」
「何？」
「・・何をしにこんなトコまで」
「良春知らない？」

「あっれ？一緒だったんじゃないんだ」
「は？」
「さっき良春、禾影の店で・・・？」
「・・・・ドコ？」
「昔の市庁があった・・・」
「なんであんなとこに？」
「あそこは建物がしっかりしてるから・・」

「そう・・・行くわよ海音」
「なんでわざわざ浮気現場に行くんだよ～」
「浮気してたら・・・慰謝料を国一個分くらい請求してやる」
「・・・・なんだそれ」

――――市庁内

ガチャ

「なぁ立那・・・こんな国を二人で飛び出そうぜ」

「だって・・嫁も子供・・」

「いいんだ！立那！俺はいい父親になるから～」

「いいの？これって俗に不倫って・・」

「不倫相手は身籠っちゃいけないなんていう法はない」

そんなことをカウンターで語る男の隣にあたしはまるで他人のように座った・・。そしてあたしの存在に驚く禾影さんにあたしは赤ワインを注文した。もちろんあたしが声を発してもまだ気付いていない

「でも良春？他国に貴方はいけないんじゃないの？官吏なんだし」

「立那と生まれてくる子供のためならそんな地位なんていらないさ」

「そうなの？じゃあ3人で暮らしてもいいの？」

「おう」

「しっかしなぁ・・良春。梨音ちゃんにばれたら殺されるぞ」

「ないな・・あいつは俺にぞっこんだからな」

「しかしなんで梨音ちゃんを捨てたんだ？」

「・・だってあいつ海音一本じゃん。
海音がいなきゃもう一回」
「お前・・殺されるぞ」
「なんだ禾影？」
「横・・」
「横・・？・・・・・・梨音！！」
「あんたが作った子じゃないの？」
「・・いやぁそのぉ」
「あぁそう・・じゃあ海音がいなかったらこんな女とヤったりしなかったわけだ？」
「・・・・・えっと」
「男に二言はないんじゃないの？ねぇお父さん？」
「・・・・・・」
「わかった・・・・。海音？」
「何？どうせ俺は邪魔者なんじゃないの？」
「・・・・うん」
「うんって言うんだ。母親のくせに」
「も～海音あんたはこいつの金遣っていい学校に通って寮に暮らしなさい！いいでしょ！？良春」
「・・・・はい」

Ｉｌｌｉｃｉｔ～破壊～（後書き）

えっと・・裏話を書きます。本当は梨音がこの後「あんたがいるから良春は出てったのよ～！」って言いながら海音に虐待をするという・・なんともグロイ＜ｂｒ＞次で一応終わりですが・・あくまでも梨音編がなので＜ｂｒ＞そっからはキャラがめちゃくちゃ増えて・・地名も増えて・・海音のヒロインが～とかそれはまた次話の後書きで・・今回も読んで頂きありがとうございます☆

Ｃｏｎｃｌｕｓｉｏｎ～了当～（前書き）

今回は最終話です。正直・・ぼろぼろでした書くことが無くてかなり焦ってしまいました。最終話というかいわゆるおまけです・・ほんとぐだぐだな感じなので＜ｂｒ＞暇つぶし程度に読んでみてください☆＜ｂｒ＞

Conclusion～了当～

Conclusion　～了当～

に生きれればいい
っても
っても
的はなく
な愚民でもなく
ために
くために
ない

夢の中でくらいまとも
現実でいかに不幸でも
現実でいかに哀れでも
たとえ世界が今日終わ
たとえ明日が今日終わ
もうこの世に生きる目
もう夢や愛を望むよう
ただ全ての人間は死ぬ
ただ全ての人間は傷付
無意味に息をし続けてる
死ぬことが怖いんじゃ
許せない
嫌いな
奴を殺せずに死ぬのが

一番怖い
せめて自分の命が終わる時
自分の嫌う人間も世界も全部が死ねばいいのに

―――その後

梨音がどうなったかは知らない。俺は梨音の勝手で国の官吏を作り出すために存在する政府直属の学校に入れられた。寮だって整ってる・・だけど俺以外の子供には母親がいない
俺が生まれてきた意味なんかこの世にきっとない。だけどあの男もあの女も俺は好きではない・・むしろ早く死ねばいいのにとすら思う
良春はどうやら梨音から逃亡するため、愛人と他国に逃げたらしい・・。そんなこと俺はどうだっていい
幼い頃から俺に一番相応しくなかったものは愛だ。幸福とか家庭とか習ってもきっと一生使わないに決まってる
俺は一体どうやって生きるのだろうか？どうせ国の直属の学校をまともに進みどうせこの国の腐敗をもっと進めるだけだろう

良春も海音いない・・これはある意味幸福で・・誰にも邪魔されない・・その後あの立那との子供がもう一人いて海音と3歳しか違わないということも実際はあたしは納得をしてないけどももうどうだって構わない
じゃあ海音を引き取れと言うけれどそんな馬鹿みたいな真似今更出来るわけがない・・・。もうあたしには夫もいなければ子もいない。そうなればいい・・・。それが事実だと・・・・。

「梨音さんって独身？」
「うん」
「だよね～こんな美しい人が子持ちなわけないじゃん」
美男子に囲まれ、良春からかっぱらった慰謝料をあたしは他国の避暑地に家を買い、酒を呑み、ただ毎日男を家に招くだけ
あたしのことを軽い女だと言うのなら良春は何なのよ！？って言えるでしょ・・海音に恋しさがないことには自分は逆に驚いた。こんなにもあたしは夫にも子にも愛がないということに

あたしは一生働かなくてもいいくらいにせしめた慰謝料・・・・別にあぁ幸せって２４時間思ってるわけじゃない。だけど、爆撃も無ければ死臭もない
不気味な煙も怪しい組織もない。ここには碧に近い色の海・・・。海中の珊瑚も綺麗に見える。砂浜には多くの観光客がいる
ここには生活に困らないほどの店もある。１年中涼しいここは・・夏には避暑で・・・。冬にはただここの住民が夏に稼いだ金で祭りをやったりしてる
全てが違う
あの頃のような生と死を彷徨うことはないし、あの頃のことを忘れられるくらい毎日が楽だった・・だって死ぬことがないのだから

「お前の父親って何してんの？」
「・・・・他国で愛人と暮らしてる」
「そりゃまた・・・」
「でもまぁ側に居られると暑苦しいしどうでもいいし」

「そんなものなのか？」
「お前の父親は？」
「今は大臣やってる」
「それはまたたいそうな」
「この国をもっともっといい国にしようって親父が言ってた」

いい国？この国のどこがいい国なのか教えて欲しい・・・１０のガキでもわかるくらいこの国は堕ちてるんじゃないのか？こういうのをきっと洗脳って言うんじゃないか？

「どんな風に・・いい国にするんだろうな」
「これ以上にもっとさ」
「・・・この戦争をしてもいい国なんだな」
「この戦争は悪い奴らを捕まえるためさ」

「悪い奴って・・・？」

「フュール以外にいるわけないだろ？」

お前・・・そんなんでこの国の官吏になって・・・どうせもっとこの国をおかしくなってくんだろ？こんなのがいるから世界は狂ってくんだろう

Ｃｏｎｃｌｕｓｉｏｎ～了当～（後書き）

えっとちなみに作者の言い訳です。これは前話で大間違いをしてしまいまして・・・。良春と立那の子供は海音と3歳差にさせなければならなかったのに・・・海音が１０歳の時に出来てしまうと・・１０年後の話が大ずれになってしまうので・・ちなみ・・その作者のいい加減な設定のせいで出来た立那との二人目は・・・どうしましょうか？さてこの後の話は２０歳になった海音のお話です・・長編過ぎる長編なので章の中でも分けたほうが・・とか思ってます

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1073a/

晏れることのない海は・・・・・

2010年10月28日01時00分発行